鬼滅の波紋使い

速川渡

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東洋の神秘的呼吸技術、波紋呼吸法。その呼吸は仙道エネルギーを持って、吸血鬼を退治するためのものてある。

もし、その波紋呼吸法の伝承者が大正時代の日本にいて、鬼を滅っさんとする秘密組織に目をつけられたら。

物語は奇妙な方向へと様変わりする。

＊本作品は鬼滅の刃に波紋呼吸の使い手がいたら、面白いのになと探して見つからなかったので自分で書いた自己満足小説です。

面白いと思ったなら、別の形でいいので誰か書いてください。

目次

読み切り短編
鬼滅の波紋使い ―― 1
第2話 ―― 4
男の奇術　上 ―― 6
男の奇術　下 ―― 8
鬼滅の波紋使い　読み切り短編まとめ ―― 10
連載版　一部　原作開始前
怪異殺しの男 ―― 18
当時の柱たち ―― 22
男の刃 ―― 25
鬼退治：表 ―― 29
童（わらべ）を護りし、泣き虫坊主 ―― 32
癒しの波紋 ―― 35
初めての説教 ―― 37
幕間：鬼の頭領と上弦の月 ―― 40
柱合会議にて（前編） ―― 42
柱合会議にて（中編） ―― 44

読み切り短編

鬼滅の波紋使い

冬のある日だった。呼吸のおかげか寒くはないが、山深くの樹林地帯で野宿という訳にもいかないので、近くにあるという村を目指して歩いていたのだが。どうやら、山小屋が在るようであった。

「あのぉ、すいません。誰かいませんか」

遠慮がちに、山小屋の戸を叩いて声をかける。

すると、ちょっとの間を開けて玄関口に白い着物を着た女性が出てくる。

「あら、まあ。旅の方かしら、こんな遅くまで歩いていらっしゃったの？　寒かったでしょう、家に泊まって行ってくださいな」

「あいや、申し訳ない。出来れば隣村まで歩を進めて置きたいのです。道を尋ねたくて」

「夜の山道は危ないですよ。特に今の時期は雪が降り積もっているから」

「む、そう、ですな。しかし、失礼では？　俺は銭はそこそこ持てど、他に役立つものを持ってる訳では」

「お礼など結構ですよ」

「いや、しかし」

「お母さんどうしたの？　誰か来たの？　」

「禰豆子かい、旅のお人だよ。このまま、隣村に行きたいそうなんだけどね」

「え！　危ないからやめた方が良いですよ！　」

娘がいるのか。ふむ、この辺りでも『出る』という噂だった。ならば、彼女らを護るためにも、泊まるかな。これで隣村が襲われては面目も立たないが。

「そうだね。分かりました、お世話になります」

「えぇ、旅のお話を子どもたちにしてやってください」

「たち？　そこな娘さん以外にもお子さんが？　」

「ええ、一人長男が隣村に降りていますが、何処かに泊めて貰っているのでしょう」
「そうですか」
本当にそうであればいいが。

山奥に居を構えているというのに、思ったより子沢山であった。男が三人いや、長男含め四人か、女が二人。見たところ旦那はなく、女手一人で大変そうだとも思ったが、子ども同士で出来ることは自分達でやっているようだ。良い人たちに出会えた。
子どもたちに質問攻めに遭い、やや話疲れたので縁側にて煙管を吹かす。一息付いた所で、血塗れた臭いと殺気を感じた。
「全く、俺が居て良かった」
こうして、その夜この竈門家が、血に溺れるようなことはなく。旅の男はその長き旅の疲れからか、昼には少し早いほどの目覚めだった。
「いやぁ、一晩どころかお昼までご馳走になってしまって」
「いいえ、旅でお疲れだったのでしょう。ゆっくりしていってください」
「お気持ちは嬉しい。たが、そうもいかぬのです。先を急ぐ身でして、ですがそうですね。長男くんにあいさつをしてからここを出ようと思います」
彼らには、軽い怪異であれば払える程のおまじないをしておいた。後は、長男の炭治郎くんだったか。その彼にも同じものを施してからここを去ろう。
それに、俺の追っ手が後は何とかしてくれるだろう。全く、組織というやつは録でもないものが多いのだ。鬼殺だか記念だか知らんが、縛られたくはない。

そうして、旅の男は竈門一家におまじないを施してから、静かに山小屋を去ったのだった。
その数時間後、帯刀した気だるげそうな男がこの山に訪れ、この家

に別の怪異が襲来し、一悶着あるのだがそれは別の話。

第2話

さて、鬼殺隊という組織から逃げに逃げ。西へ東へえっちらおっちらしてたわけではあったのだが。とてつもなく強い、柱とか言う連中に五、六人で囲まれてしまい逃げようが無くなり、仕方なくお縄についた。

どこぞの山の奥地、産屋敷邸に連れられて、九人の柱と病に犯された男、産屋敷某に無理やり面会の運びと相成った。

「貴方には、鬼を日輪刀もなく倒す力があると聞いている」

「まぁ、そうだな。日輪刀がなんだかは知らないが、そのような力があるのは確かだ。基本的に怪異殺しをしている」

「私たちは、鬼の元凶である鬼舞辻無惨を殺す為に――」

「あー、皆まで云うな。つまり俺に協力しろ。或いはその力を教えろと？　」

「……短的に言えば、そうなる」

ため息を一つ。柱と呼ばれるガキどもから、若干殺気を飛ばされているが、気にしない。

彼らに一杯喰わされたのは、数人で囲まれてしまったが故だ。なので、二対一までなら確実に逃げ切れた。その彼らの顔を観る。そして、確信を得た。

「両方ともお断りだ」

「何故だ！　俺たちが気に入らないからか！　」

「違う、確かに追っかけ回されて嫌な気分になった。しかし、教えを請うというなら、それはそれと流すさ」

人相の悪い傷だらけの柱が喚いて来たので、宥めながら応えてやる。

「理由は二つ。一つは組織が苦手だからだ。組織に属すると自由に動けなくなる。行動に制限がうまれる。それが堪らなく嫌いなんだ」

「なら、教えるくらいなら」

「二つ目。柱といったか、君らには確かに素質はある。教えれば、修行を数ヶ月すればかなりの使い手となるだろう」

「じゃあ、何故！　」
「君ら、早死にしても構わないという心構えだろ？　俺はこの力を来るべき時まで、長く継承し続けなければならない。継承し続ける気がないやつに教えるつもりはない」
彼らは純粋に鬼、鬼舞辻某という元凶さえ倒せれば、死んでも構わないという面持ちであった。
こんな若い少年少女たちにそんな覚悟が見られるとは、幾つもの死線を通って来たのだろう。
確かに教えれば、彼らはより強くなれるだろう。より生存率も高くなるだろう。だが、それは彼らの都合だ。俺の弟子としてこの力を継ぐ気が無い者に、教えるなんてお節介してやる義理はない。
俺の言葉に何も返せず。焦る表情を見せる柱（ガキ）たち。そして、落ち着き払い病魔に犯されて、二、三咳払いをした余命幾ばくもない青年はじっとこちらを見据えている。
「では、貴方の力の継承にたる者を手配しましょう。代わりに貴方の力を彼らに教えてください」
「なるほど、そう来たか」
先日、免許皆伝とした西洋人の弟子はいたが、日本にも幾人か弟子を作って置いても悪くはないだろう。
「分かった分かった。その根気強さに負けたよ。この子らにその力を、波紋の呼吸法を教えよう」
こうして、男は波紋の呼吸法という、太陽の力を少年少女たちに伝授するのだった。
これにより、死ぬはずだった者たちの運命は変わったりするのだが、それは別の話。

男の奇術　上

「全く、俺が居て良かった」
　肺から、煙をすべて吐き出し。素足で、雪の上に足を踏み出す。本来であれば、冬の夜風と雪は、冷たいどころかすぐに霜焼けに苦しむことになるだろう。だが、自分にその心配はない。
「出てきな。お前らはたしか強いものの血肉を好むのだろう？　」
「ふん、人間か。日輪刀も持っていない癖に偉そうに」
「そのなんたらいうものは、俺には無用の長物なものでね」
　そういって、煙管の葉を捨て、別の葉に変える。それと同時に煙管に意識を集中させ、煙管の吸い口を怪異に向けてやる。
「確かに貴様からは強い気配を感じる、だが、刀も持っていない人間など恐るるに足らぬ」
「そうだな、お前に忠告だ。油断のし過ぎは死を招くぞ」
「はっ――、ほざｋ――」
　一呼吸を挟んだのちに、人差し指と中指で挟んだ煙管（ソレ）を怪異の右の目に向けて投げつけてやる。慢心をしているのか、怪異は避けもせずこちらに走りこんでくる。どうやら、その油断のせいか、暗闇だというのに気づいていないらしい。
　煙管が、煙管自体が発光していることに――――
　当然、怪異の目に煙管（ソレ）は突き刺さる。何もない煙管をこの怪異に放ったところでほぼ痛みはなく、その傷も煙管を引き抜けば、即時に再生するだろう。その怪異の名は鬼。不老不死、日光浴びぬ限り死なず、特定の刀で首を刎ねなければ甦る。
　だがしかし。
「くなぁあああ〟あ〟あ〟あ〟あ〟」
　鬼の威勢の良いその声は、苦悶の声へと変わった。鬼の右目には焼ける程の痛みと悶える程の苦しみがあふれる。鬼となって久しく、痛みとは無縁だったのだろう。何が起こったのかわからない。しかし、投げつけてきた煙管で、目が潰れたのは明白だ。理由はわからないが、彼の男は自分を傷つける手段を持っているのだ。煙管を目から引

き抜こうとし、右手で煙管を掴む。
掴んだはずだ。だのに、だというのにどうして。右の手の感覚が消えた？
「ぐぎぃあ〃あ〃あ〃あ〃あ〃」
もはや、鬼は立っていられない。膝から崩れ落ち、反動で頭（かぶり）は下を向いて、煙管は地に落ちる。その煙管には鬼の血糊がべったりとついているはずであるが、全く血糊などついておらず、土ぼこりを少し被った程度だ。
やれやれと、男は鬼へと近寄る。鬼のその姿は、右目から右後頭部にかけて消滅しており、また右手が手首ごと消失し、屈みこんでいる。
「鬼の目にも涙、か？　それは兎も角として、うるさい黙れ」
そのつぶやきと共に、鬼の喉のあたりをその素足でけり抜ける。その蹴りで下を向いていた鬼の頭（かぶり）は夜の星を見ることもなく静かに消えていった。
「ふぅ、運動にもならなかった。が、もう数匹いるな」
今の鬼の喚きで目が冴えてしまった。今のそれより、骨はあるだろうか。と、煙管を拾い上げて、吸い口を着物で拭って口に咥え火を灯す。男は足袋も履かず冬の夜空の元、軽く散歩に出たのだった。
続く

男の奇術　下

夜の山小屋、男は裸足で母屋から少し離れて、暗い木陰へ声をかける。

「さて、掛かっておいで、分かってるからさっさと」

「ック、なにしやがったんだお前」

「カンケーあるか！　あいつを殺して後ろのやつらも皆殺しだ！　」

暗闇からできた、二体の鬼が正面切って襲い掛かってくる。突進して、爪やその牙、或いはこぶし、或いは蹴りを仕掛けてくるのだろう。煙管から煙を吸い込んで肺に溜める。あまり体力は消費しないでおきたい。

まだ後ろに、控えがいるようであるしな。

彼らは接近戦距離まで近づいてくると、片方は爪を突き立て、もう片方は拳を振るってきた。男はその攻撃をひらりと交わして彼らの顔めがけて肺から煙を吐き出す。

［紫煙式波紋疾走］

その煙をかわす手段もない鬼たちは、攻撃の息継ぎに一呼吸してしまう。そして、煙を吸い込む。

「ゲホゴホ、くそ。なｎ――――……――っ!?」

「ウェッホ、オッホ、息ｇ――――っ!?」

煙を吸い込んでしまった鬼たちは、いつの間にか首に亀裂が入っていた。喉もつぶれてしまったようだ。何が起こったのか、困惑しているうちに男は彼らの喉元めがけ、両腕の貫手をそれぞれに打ち込む。頭は刎ね飛び、やがて蒸発するようにして、消滅する。

「母屋から、遠いとはいえ叫び声を間近で聞く趣味もないしな」

そうぼやいて、煙管で一服する。その姿を見ながら佇む、洋服に身を包んだ青年が拍手をしながらこちらに向かってくる。

「お見事だ。それで、お前は何者だ？　鬼を無手で殺す技術など、初めて見たぞ」

「礼儀を知らねぇ奴だな。おっかあに名前を聞くときは自分からと習わなかったのか？　といっても、お前の名は知っているがな」

「なんだと？　」
　男の煽りが気に食わないのか、自身の配下をあっさり倒され不服なのか。青年は男の言葉に苛立った。
　その姿に含み笑いをして、再び一服したのちに男は青年に名乗りを上げた。
「鬼という怪異の元凶、日本最初の鬼、鬼舞辻無惨だな？　俺は怪異殺しをやっている男だ」
「怪異殺しだと？　なるほど、本物というわけか。しかし、先のアレはなんだ」
「なんだと聞かれて答える義理はない。ここでやり合うもいいが、互いに準備不足だろう。帰りな」
「ふ、いいだろう。ここは立ち去ってやる、そのうちに貴様の力の正体も暴き惨たらしく殺してやるとも」
「そいつは結構。できない夢でも、声に出せば言霊は乗る。恐ろしい呪言を吹っ掛けられたものだな」
　後でお祓いしないと、と余裕を以ておちゃらける男と青筋を立てて分かりやすく苛立っている青年。
　こうして、青年は苛立ちながらもその場を去り、男はそれを見送ってから母屋に戻って床に就く。
　朝日はまだだが、かなり夜更かしをしてしまった。明日はつらいだろうなと苦笑いしながら男は、眠りについた。
　こうして、竈門家を守り切った怪異殺しの男は、翌昼間までぐっすりと眠りこけているのであった。

鬼滅の波紋使い　読み切り短編まとめ

冬のある日だった。呼吸のおかげか寒くはないが、山深くの樹林地帯で野宿という訳にもいかないので、近くにあるという村を目指して歩いていたのだが。どうやら、山小屋が在るようであった。

「あのぉ、すいません。誰かいませんか」

遠慮がちに、山小屋の戸を叩いて声をかける。

すると、ちょっとの間を開けて玄関口に白い着物を着た女性が出てくる。

「あら、まあ。旅の方かしら、こんな遅くまで歩いていらっしゃったの？　寒かったでしょう、家に泊まって行ってくださいな」

「あいや、申し訳ない。出来れば隣村まで歩を進めて置きたいのです。道を尋ねたくて」

「夜の山道は危ないですよ。特に今の時期は雪が降り積もっているから」

「む、そう、ですな。しかし、失礼では？　俺は銭はそこそこ持てど、他に役立つものを持ってる訳では」

「お礼など結構ですよ」

「いや、しかし」

「お母さんどうしたの？　誰か来たの？　」

「禰豆子かい、旅のお人だよ。このまま、隣村に行きたいそうなんだけどね」

「え！　危ないからやめた方が良いですよ！　」

娘がいるのか。ふむ、この辺りでも『出る』という噂だった。ならば、彼女らを護るためにも、泊まるかな。これで隣村が襲われては面目も立たないが。

「そうだね。分かりました、お世話になります」

「ええ、旅のお話を子どもたちにしてやってください」

「たち？　そこな娘さん以外にもお子さんが？　」

「ええ、一人長男が隣村に降りていますが、何処かに泊めて貰っているのでしょう」

「そうですか」
本当にそうであればいいが。

山奥に居を構えているというのに、思ったより子沢山であった。男が三人いや、長男含め四人か、女が二人。見たところ旦那はなく、女手一人で大変そうだとも思ったが、子ども同士で出来ることは自分達でやっているようだ。良い人たちに出会えた。
子どもたちに質問攻めに遭い、やや話疲れたので縁側にて煙管を吹かす。一息付いた所で、血塗れた臭いと殺気を感じた。
「全く、俺が居て良かった」

＊＊＊＊＊

肺から、煙をすべて吐き出し。素足で、雪の上に足を踏み出す。本来であれば、冬の夜風と雪は、冷たいどころかすぐに霜焼けに苦しむことになるだろう。だが、自分にその心配はない。
「出てきな。お前らはたしか強いものの血肉を好むのだろう？　」
「ふん、人間か。日輪刀も持っていない癖に偉そうに」
「そのなんたらいうものは、俺には無用の長物なものでね」
そういって、煙管の葉を捨て、別の葉に変える。それと同時に煙管に意識を集中させ、煙管の吸い口を怪異に向けてやる。
「確かに貴様からは強い気配を感じる、だが、刀も持っていない人間など恐るるに足らぬ」
「そうだな、お前に忠告だ。油断のし過ぎは死を招くぞ」
「はっ――、ほざｋ――」
一呼吸を挟んだのちに、人差し指と中指で挟んだ煙管（ソレ）を怪異の右の目に向けて投げつけてやる。慢心をしているのか、怪異は避けもせずこちらに走りこんでくる。どうやら、その油断のせいか、暗闇だというのに気づいていないらしい。
煙管が、煙管自体が発光していることに――――
当然、怪異の目に煙管（ソレ）は突き刺さる。何もない煙管をこの怪異に放ったところでほぼ痛みはなく、その傷も煙管を引き抜けば、即時に再生するだろう。その怪異の名は鬼。不老不死、日光浴びぬ限り死な

ず、特定の刀で首を刎ねなければ甦る。
だがしかし。
「くなぁあああ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟」
鬼の威勢の良いその声は、苦悶の声へと変わった。鬼の右目には焼ける程の痛みと悶える程の苦しみがあふれる。鬼となって久しく、痛みとは無縁だったのだろう。何が起こったのかわからない。しかし、投げつけてきた煙管で、目が潰れたのは明白だ。理由はわからないが、彼の男は自分を傷つける手段を持っているのだ。煙管を目から引き抜こうとし、右手で煙管を掴む。
掴んだはずだ。だのに、だというのにどうして。右の手の感覚が消えた？
「ぐぎぃあ〟あ〟あ〟あ〟あ〟」
もはや、鬼は立っていられない。膝から崩れ落ち、反動で頭(かぶり)は下を向いて、煙管は地に落ちる。その煙管には鬼の血糊がべったりとついているはずであるが、全く血糊などついておらず、土ぼこりを少し被った程度だ。
やれやれと、男は鬼へと近寄る。鬼のその姿は、右目から右後頭部にかけて消滅しており、また右手が手首ごと消失し、屈みこんでいる。
「鬼の目にも涙、か？　それは兎も角として、うるさい黙れ」
そのつぶやきと共に、鬼の喉のあたりをその素足でけり抜ける。その蹴りで下を向いていた鬼の頭(かぶり)は夜の星を見ることもなく静かに消えていった。
「ふぅ、運動にもならなかった。が、もう数匹いるな」
今の鬼の喚きで目が冴えてしまった。今のそれより、骨はあるだろうか。と、煙管を拾い上げて、吸い口を着物で拭って口に咥え火を灯す。男は足袋も履かず冬の夜空の元、軽く散歩に出たのだった。
＊＊＊＊＊
夜の山小屋、男は裸足で母屋から少し離れて、暗い木陰へ声をかける。
「さて、さっさと掛かっておいで」
「ック、なにしやがったんだお前」

「カンケーあるか！　あいつを殺して後ろのやつらも皆殺しだ！　」
暗闇からできた、二体の鬼が正面切って襲い掛かってくる。突進して、爪やその牙、或いはこぶし、或いは蹴りを仕掛けてくるのだろう。煙管から煙を吸い込んで肺に溜める。あまり体力は消費しないでおきたい。
まだ後ろに、控えがいるようであるしな。
彼らは接近戦距離まで近づいてくると、片方は爪を突き立て、もう片方は拳を振るってきた。男はその攻撃をひらりと交わして彼らの顔めがけて肺から煙を吐き出す。
［紫煙式波紋疾走］
その煙をかわす手段もない鬼たちは、攻撃の息継ぎに一呼吸してしまう。そして、煙を吸い込む。
「ゲホゴホ、くそ。なｎ――――……――っ!?」
「ウェッホ、オッホ、息ｇ――――っ!?」
煙を吸い込んでしまった鬼たちは、いつの間にか首に亀裂が入っていた。喉もつぶれてしまったようだ。何が起こったのか、困惑しているうちに男は彼らの喉元めがけ、両腕の貫手をそれぞれに打ち込む。頭は刎ね飛び、やがて蒸発するようにして、消滅する。
「母屋から、遠いとはいえ叫び声を間近で聞く趣味もないしな」
そうぼやいて、煙管で一服する。その姿を見ながら佇む、洋服に身を包んだ青年が拍手をしながらこちらに向かってくる。
「お見事だ。それで、お前は何者だ？　鬼を無手で殺す技術など、初めて見たぞ」
「礼儀を知らねぇ奴だな。おっかあに名前を聞くときは自分からと習わなかったのか？　といっても、お前の名は知っているがな」
「なんだと？　」
男の煽りが気に食わないのか、自身の配下をあっさり倒され不服なのか。青年は男の言葉に苛立った。
その姿に含み笑いをして、再び一服したのちに男は青年に名乗りを上げた。
「鬼という怪異の元凶、日本最初の鬼、鬼舞辻無惨だな？　俺は怪異殺

しをやっている男だ」
「怪異殺しだと？　なるほど、本物というわけか。しかし、先のアレはなんだ」
「なんだと聞かれて答える義理はない。ここでやり合うもいいが、互いに準備不足だろう。帰りな」
「ふ、いいだろう。ここは立ち去ってやる、そのうちに貴様の力の正体も暴き惨たらしく殺してやるとも」
「そいつは結構。できない夢でも、声に出せば言霊は乗る。恐ろしい呪言を吹っ掛けられたものだな」
　後でお祓いしないと、と余裕を以ておちゃらける男と青筋を立てて分かりやすく苛立っている青年。
　こうして、青年は苛立ちながらもその場を去り、男はそれを見送ってから母屋に戻って床に就く。
　朝日はまだだが、かなり夜更かしをしてしまった。明日はつらいだろうなと苦笑いしながら男は、眠りについた。

＊＊＊＊＊

　こうして、その夜この竈門家が、血に溺れるようなことはなく。旅の男はその長き旅の疲れからか、昼には少し早いほどの目覚めだった。
「いやぁ、一晩どころかお昼までご馳走になってしまって」
「いいえ、旅でお疲れだったのでしょう。ゆっくりしていってください」
「お気持ちは嬉しい。たが、そうもいかぬのです。先を急ぐ身でして、ですがそうですね。長男くんにあいさつをしてからここを出ようと思います」
　彼らには、軽い怪異であれば払える程のおまじないをしておいた。後は、長男の炭治郎くんだったか。その彼にも同じものを施してからここを去ろう。
　それに、俺の追っ手が後は何とかしてくれるだろう。全く、組織というやつは録でもないものが多いのだ。鬼殺だか記念だか知らんが、縛られたくはない。

そうして、旅の男は竈門一家におまじないを施してから、静かに山小屋を去ったのだった。
その数時間後、帯刀した気だるげそうな男がこの山に訪れ、この家に別の怪異が襲来し、一悶着あるのだがそれは別の話。
＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
さて、鬼殺隊という組織から逃げに逃げ。西へ東へえっちらおっちらしてたわけではあったのだが。とてつもなく強い、柱とか言う連中に五、六人で囲まれてしまい逃げようが無くなり、仕方なくお縄についた。
どこぞの山の奥地、産屋敷邸に連れられて、九人の柱と病に犯された男、産屋敷某に無理やり面会の運びと相成った。
「貴方には、鬼を日輪刀もなく倒す力があると聞いている」
「まぁ、そうだな。日輪刀がなんだかは知らないが、そのような力があるのは確かだ。基本的に怪異殺しをしている」
「私たちは、鬼の元凶である鬼舞辻無惨を殺す為に――」
「あー、皆まで云うな。つまり俺に協力しろ。或いはその力を教えろと？　」
「……　端的に言えば、そうなる」
ため息を一つ。柱と呼ばれるガキどもから、若干殺気を飛ばされているが、気にしない。
彼らに一杯喰わされたのは、数人で囲まれてしまったが故だ。なので、二対一までなら確実に逃げ切れた。その彼らの顔を観る。そして、確信を得た。
「両方ともお断りだ」
「何故だ！　俺たちが気に入らないからか！　」
「違う、確かに追っかけ回されて嫌な気分になった。しかし、教えを請うというなら、それはそれと流すさ」
人相の悪い傷だらけの柱が喚いて来たので、宥めながら応えてやる。

「理由は二つ。一つは組織が苦手だからだ。組織に属すると自由に動けなくなる。行動に制限がうまれる。それが堪らなく嫌いなんだ」
「なら、教えるくらいなら」
「二つ目。柱といったか、君らには確かに素質はある。教えれば、修行を数ヶ月すればかなりの使い手となるだろう」
「じゃあ、何故！　」
「君ら、早死にしても構わないという心構えだろ？　俺はこの力を来るべき時まで、長く継承し続けなければならない。継承し続ける気がないやつに教えるつもりはない」
　彼らは純粋に鬼、鬼舞辻某という元凶さえ倒せれば、死んでも構わないという面持ちであった。
　こんな若い少年少女たちにそんな覚悟が見られるとは、幾つもの死線を通って来たのだろう。
　確かに教えれば、彼らはより強くなれるだろう。より生存率も高くなるだろう。だが、それは彼らの都合だ。俺の弟子としてこの力を継ぐ気が無い者に、教えるなんてお節介してやる義理はない。
　俺の言葉に何も返せず。焦る表情を見せる柱（ガキ）たち。そして、落ち着き払い病魔に犯されて、二、三咳払いをした余命幾ばくもない青年はじっとこちらを見据えている。
「では、貴方の力の継承にたる者を手配しましょう。代わりに貴方の力を彼らに教えてください」
「なるほど、そう来たか」
　この前、免許皆伝とした西洋人の弟子はいたが、日本にも幾人か弟子を作って置いても悪くはないだろう。
「分かった分かった。その根気強さに負けたよ。この子らにその力を、波紋の呼吸法を教えよう」
　こうして、男は波紋の呼吸法という、太陽の力を少年少女たちに伝授するのだった。
　これにより、死ぬはずだった者たちの運命は変わったりするのだ

が、それは別の話。

連載版　一部　原作開始前

怪異殺しの男

明治の世、技術、文化などが大きく西洋寄りとなり、妖(あやかし)や怪異はあまり信じられることがなくなっていた。実際に見たものが、ほぼ居なかったためだ。

居なかったという言葉では語弊が生まれるだろうか、見たものは皆一様に死するか狂人と成り果ててしまうか。正気を保ったまま、それらから生き残るものは少ない。

男は、そのような世の中で、誰から報酬を受けるでもなく。怪異や妖(あやかし)の影あるうわさあれば、その者たちを殺し、或いは祓い被害に遭った者たちを救っていた。

外見にして齢(よわい)は、十代後半。しかして、彼を知るものは少なくとも彼が二、三十年は生きていると話す。もしかして、男自体が怪異なのではないかと噂する者もいるが、とある健康法によるものであると男は嘯く。基本山奥に住まい、人と会うことは少ない。

その男を探して、一人のなよっとした病弱そうな青年がその山奥へと訪れる。そこには山小屋と川にかかった水車、畑があった。そのあたりに人の気はなく、山小屋にも誰もいないようである。出掛けているのだろうか。青年はその山小屋前で待とうか検討しているところに、後ろから声がかかる。

「あんた、俺の家になんか用かい？　」

「ええ、貴方が怪異殺しさんでしょうか」

「まあ、そうだな。お前さんのような、若いもんがこんな山奥に来るとは珍しい。何か依頼ごとか？　」

「依頼といえばそうなるでしょうが、口頭で直ぐ言い終わる内容でもありません」

「良いだろう、前の仕事の清めが今終わったとこだ」

男は青年を小屋の中へ促し、囲炉裏までつれて湯を沸かします。男は煙管を片手にとり、火をくべようとして躊躇する。

「煙草はダメかね？　」
「いえお気になさらず」
「そうかい、なら遠慮は失礼だ」
　微笑をこぼして、煙管に火を入れ一服する。そうして、煙草の煙を体に循環させ、湯が沸いたところで茶を注ぐ。
「飲みな、ここまで歩きで疲れたろう」
「ええ、ありがたく頂戴します」
「ふむ、なんとも我慢強い奴だな。普通なら煙管を取り出すあたりで、話をけしかけるようなのが多いんだが、茶を出すまで依頼について言葉を発しなかったのは、あんたが初めてさ」
「いえ、喉が渇いていたもので、話すに話せなかったのです」
「そうか、じゃあそろそろ聞かせてくれないか？　」
「ええ、まず自己紹介をさせて頂きます。私は産屋敷耀哉と申します」
「自己紹介なんぞするやつも、初めてだな。で、用件は何だってんだよ」
　青年は真っ直ぐと男を見据えて、何か悟りきったような面持ちで言葉を発する。男はその顔から死にかけている老人を思い出した。彼の年代がしていい顔ではない。そして思ってみればこの声も、心地のよさを感じる。何か事情持ちなのだろう。
「私の依頼というのは鬼退治です」
「鬼退治ねぇ、坊ちゃん。もっと具体的に聞かせな」
「はい、私の一族は鬼を殺す鬼殺隊というものを組織しています。貴方のその幼き頃から、鍛えられた力を貸してほしいのです」
「……話の答えを出す前に二つ聞かせろ。お前が、なぜ、それを知っている。お前が言う力ってのは歴史の影の存在であり、知るものは少ない」
「さて、そういったものを知るコネが、私にあるというだけの話です」
「……そうか、ではもう一方だ。俺があんたの話を蹴ったとして、あんたはその力の存在を一生胸に秘めていられると誓えるか？　」
「もちろんですとも」
　青年は柔和な笑みを浮かべてそう答えた。男はそれを見て、恐怖を

覚えた。何故って、その青年に安心感に似た気持ちを得た故だ。青年はどのようなことになっても、言わないでいてくれると、確信できてしまった。それは可笑しいのだ。自分は警戒していて、その警戒心が一気に信頼に変わった。これは異常だ。

一つ、呼吸を入れる。煙管を吸うではなく純粋な深呼吸。落ち着くための呼吸だ。

「ふふ、坊ちゃん。あんた中々に傑物だな。ろくな大人になんねぇだろうさ」

「ええ、心得ています。それでも、私は鬼の元凶を倒さねばならぬのです」

「鬼の元凶、鬼舞辻無惨か。ウチの一族でも代々伝わってるよ。幸いにも遭ったことはないようだけどな」

「その男は我が一族の恥部なのです。貴方のその力は、奴に対してかなり有効でしょう」

「伝え聞く、鬼の特徴と同じであればその通りだろうさ。やってやる義理はないがな」

「確かにその通りです。貴方は金には興味がないようですし、対価を求めるわけでもない」

「そうさな、断る腹積もりでいた。だけど、お前は目的のためなら何でもしそうだ」

男は続けて、「対抗策は俺以外にもあるのだろう、そして、その策は多くの命が伴う。違うか」と青年をにらみつけて、怒気を混ぜた声で言い放つ。

青年は、ため息を吐いて、困ったように声を漏らす。

「ええ、その通り。私は鬼舞辻無惨を殺すために手段を問う気はありません」

「……お前さん、地獄に落ちるぜ？　」

「構いませんとも、目的が成るのなら」

「はぁ、まあ。断れないよなぁ」

「ありがとうございます。ですが、こちらの考えを見透かされるとは」

「甘く見るなよ小僧。こちとら今年で齢四十だ。腹芸の一つ二つ見

抜くなど造作もないさ」
「失礼しました。では、わが屋敷に案内します」
こうして、怪異殺しの男は、鬼退治に駆り出された。これが、この後の運命を大きく変えるのだが、今は誰も知る由なし。

当時の柱たち

産屋敷の案内に従って、歩くことしばし。道の中途で肉体が出来ている訳でない青年には、多くの休憩を要する。余り道草を喰うわけにもいかないので、男は青年をおぶって先を進んでいく。

約半日の間、歩き続けて三十里程（約１２０ｋｍ）。本来であれば、もう数日は掛かっていただろう道のりに、男は休みもなしに息切れ一つ起こさず、青年一人背負いながら辿り着いた。産屋敷はその並々ならぬ体力と、体躯にやや驚くと同時に、鬼を殺せるほどの力があるということを確信させられた。目的地に着いた頃には夜の帳が降りつつあった。

「随分と立派な屋敷だな」

「私の一族は、代々この屋敷の主を受け継いでいます」

なるほど、これほど立派な屋敷の主で、鬼殺しの扇動をしているのであれば、先の声やたち振る舞いに納得がいく。男は、屋敷の手前でその主を降ろすと、邸内を案内するよう促す。それに頷き、産屋敷は男に声をかける。

「ここまでの送迎に感謝を。そして、ようこそ我が屋敷へ。歓迎しよう」

「ああ、茶の一杯くらいは出るんだろうな」

軽く自分がした対応に引っ掛けて一つ皮肉を零して、邸内に入っていく。邸内には嫁か兄妹と思わしき女（後で聞いてみれば嫁だったようだ）と黒髪の赤子が一人であった。夜も遅くその日は、その産屋敷邸に泊めてもらうことにした。雑魚寝で十分だった男は、布団の柔らかさというものを知る。

翌日、青年の組織する鬼殺隊という鬼殺し集団の説明を受け、その組織の最上階級である『柱』になってほしいと申し込まれる。男は苦笑しながら、その話を呑んだ。

（柱の男を倒すための技術を持っている俺が、柱と呼ばれることになるとはな……運命とは奇妙なものだ）

そして、今日ここにその最上階級である他三人の『柱』を呼んであ

るという。その彼らと対面し同じ最上階級という立場で頑張ってほしいと、やけに心が洗われるような声でそう言われる。いつの間にか、敬語をやめていたが、それは上下関係を確りと確立させるためであろうと納得した。そして、その違和感もすぐに消え、やはり恐ろしい小僧だ、と男は心を落ち着けるために煙管に火を落とし一服した。

やがて、黄色と朱か赤かの混じり毛の草臥れたような男と天狗の面を被った男、そしてやや上背の低い顔に傷がついた男の三人が、屋敷の縁側から見える庭の方へ集合していた。それぞれ、『炎柱』『水柱』『雷柱』だったか。

「やあ、皆。急に呼び立てたにも関わらず、集まってくれたようで何よりだ」

その言葉に、件(くだん)の男たちは平伏した。産屋敷のことを主というか、神のように崇めているように見えなくもない。なんという神格的才能(カリスマ)か。青年の才に、ゾッとしているとその青年が自分を呼び紹介しようとしている。屋敷の奥から煙管を加えながら招集に応じて、縁側脇に腰かける。肺の中の煙を吐き出し、やや緊張はほぐれた。あまりこういった場に縁がないせいか、柄にもなく気が張り詰めていたのだ。

「やや、失敬。こういった席にはあまり縁がないもので、少し気分を落ち着かせていた」

「紹介しよう、彼が例の日輪刀なしに鬼を殺せる怪異殺しの男だ。彼にも柱を勤めてもらう」

「紹介に預かったものだ。産屋敷殿の言うように怪異殺しを生業としている」

「なるほど、彼が。心強いですな」と『水柱』は言い、

「ふむ、御館様の推薦であれば、実力は確かなのだろう宜しくな」と『雷柱』は言った。

そして、納得がいかないのか不満げに『炎柱』はこう切り出した。

「御館様の推薦ならば、それはよいのです。しかし、彼の名は？　名も知らぬものを信用せよというのは些か」

「まぁ、その通りだな。理由を言っておこう。名乗らないのではない、

名乗れないのだ」
「それは一体……？　」
「旧い怪異に鵺というものがある。正体不明の怪物というが、あれは取り憑いた者の正体を奪うのだ。名というのは、その者の正体を示す。俺は鵺に憑かれて正体を、名を、奪わせた。故に俺に正体はなく。他の怪異は正体のない俺に憑いたり、呪ったりはできない。だから、名は教えられない。俺の安全のためにもな」
　一応、明かすことができないというわけではない。しかし、彼らが敵前で明かしてしまえば、俺は正体不明でなくなる。だから、言えないのだ。
　その理由に一応納得したのか、『炎柱』は引き下がった。
「うん、話は纏まったようだね。じゃあ貴方を『波柱』とする。よろしくね」
　恐らくではあるが、産屋敷は自分の名を知っている。いや、知っていてもおかしくない。そんな気配を感じる。
　それでもあえて名を呼ばないでいてくれることに感謝し、『波柱』を引き受ける。
「ああ、宜しく」

男の刃

「刀なんぞ要らん、帰ってくれ」
「うるせぇ！　オレが丹精込めて鉄を撃ち、造った刀を見もしねぇで要らねぇたぁ、どういう了見だってんだ！　」
先日の柱合会議とやらから、数日。ひょっとこの面の声が甲高い者が家に押し掛けて来て刀を渡そうとしてくる。
男は刀剣術に縁がなく、さらに武闘術を極めているため、余計に刀剣の類いに手を出そうとは思わないのだった。この身一つで十分であるという自負が余計にそうさせたのである。
「押し売りなら、他所でやんな。廃刀令の世で売れるのかは疑問だが」
「がぁあああ、うるせぇ！　とにかく受けとれってんだよ」
「要らんと言ってるだろうが、落ち着け」
「うー！　けー！　とー！　れー！　よー！　」
「落ち着けって」
ひょっとこ面は刀を男の体に押し付け、引こうとしない。やれやれと男は、ひょっとこ面の肩に手を置く。すると軽く電流のようなものが走る。
「うわっ。ビリッって、なんぞ今の！　」
「少しは落ち着いたか？　」
「へっ？　あ、あぁ、済まねぇ。興奮してたもんでな」
「じゃあ帰れ。刀は買わんぞ」
「違っ、オレは産屋敷様から頼まれて、あんたに刀を打った鉄崎忍ってんだ。よろしくな」
「あん、なんだよ。産屋敷の関係か。始めにそいつを言えよな。取り敢えず、上がってけ」
大人しくなったひょっとこ面を囲炉裏まで、連れて茶を出してやり、改めて要件をまとめる。
「成る程ね、鬼殺しにはこれが必須と。それでお前さんがこいつを造ったわけだ」
「あぁ、渾身の出来だ。それで興奮しちまってさ」

ひょっとこ面の刀鍛冶は、再びその刀を押し付けて来る。恐らくは、刀鍛冶の心血を注いで造られたそれを、突き返すわけにもいかず。受け取り、取り敢えず鞘から抜いてみた。

美しい刀であった。刃の波紋は乱れなく、それでいて鋭い刃先は万物を断てるだろうと確信できる。そして、鈍い銀色であったそれは、小判のような小金色へと変色する。（驚いたが、そういう鉄を使ったらしい）

「いや、でも、金の日輪刀なんて聞いたこともねぇ。あんたはやっぱ特別なんだな」

「そうなのか？　しかしなぁ、刀は修めとらんから、家に飾るくらいしか出来ん」

「はぁあああああ!?　飾りモンにするだぁ？　ふざけてんのかぁ!!　ちゃんと使えよぉ!!　」

「いや、とは言ってもな。世は刀剣を許していないし、確か鬼殺隊は政府非公認なのだろう？　なおさら良くない。警察と揉めるのは御免だ」

それに何より、と男は続ける。

「俺はこの身一つで、怪異（おに）を退治してきた。だから、逆に邪魔になる」

男は何でもないように、そう言った。それが当然であるかのように。刀鍛冶は、その慢心も虚勢も感じられぬ男の言葉に、怒気が失せてしまった。

「分かった。だが、オレはお前を許さん。オレの渾身の刀を、飾りモノにすると言ったお前を許さん」

「そうだろうとも、だから嬢ちゃん。怨み言やらつらみを俺にぶつける権利をやる」

「ハァ!?　ど、どうして女だって」

「その声に、体格からしたら年頃の女（おなご）だろう。言葉遣いがずいぶん、男勝りだったがな。まぁ、気にするな。俺に呪言の類いは通じない。好きなだけ、吐き出すといい」

「っ――――！　なんだよ、何なんだよ!!　どいつもこいつもオレを馬鹿にしやがって！　柱だからってテメェも調子に乗ってるんだろ!!

エェ!? 舐めるのも大概にしろよコラ――」
刀鍛冶には、才がなかった。淑やかなで慎ましい女子が好まれる当時の世で、生け花や楽器の才がなかった。性格も父親似で男勝り、さらには荒っぽく即癇癪を起こすような、親が当世でいうノイローゼになるのにそう時間は掛からなかった。そのうちに、捨て子となり刀鍛冶に拾われた。
刀鍛冶としての才があった。彼女の師は癇癪を優しく流し、荒っぽさを受け入れた。その師も他界し、辛かった。性格に難があった彼女は、嫌われものでしかして優秀だった。優秀でなければ、居場所がなかった。
産屋敷に腕を認められ、今回柱の刀を造る大仕事を申し付けられた。
面の下で半泣きしながら、そう怒鳴り続ける刀鍛冶。
「認め、られたのに、えぐっ、頑張、った、うぅ、のに。ふぅ、はぁ、はぁ。お前が、飾りモンにする、といった、それはなぁ。アタシの魂なんだよぉ!! 」
男は黙って聞いていた。女の刀鍛冶等侍の世にも、ほぼ居ないだろう。であれば、当然闇を背負っていると考え、案の定であった。だから、刀鍛冶を煽ってその闇を吐かせた。
良いこととは言いがたい、しかし、荒療治でもそういうことは必要なのだ。怪異は心の闇に惹かれ、成るものであると男は知っている。
必然か偶然か、刀鍛冶は心がスッとしていた。今まで、溜めに溜め込んだ怒りを、哀しみを、全て吐き出したためだ。そして、怒鳴り疲れたのか、嘔吐いている。
「はぁ、はぁ、はぁ、ゲホッゴホッ、うぇ、えふ。ふう、はぁ」
「そうまで力説されちゃあ、飾りモンにするのは止めだ。腰に下げとくお守りとしておくよ」
(それに、あいつなら使えるだろう)
まだ言うかと威圧を掛ける刀鍛冶。しかし、感情をさっき出し切ってしまったので、怒る気にもならなかった。
「はぁ、飾りよりは大分ましだ。いざってときに使えるようにしとけ

よ」
「考えとくよ」
「後、あんがと」
「あぁ？　なんか言ったか？　」
「うっせぇやい！　帰る！　」
　そうして、刀鍛冶は定期的に刀の手入れと称して、男の家に愚痴をこぼしに来ているそうな。それ故か、癇癪癖もほんの少し大人しくなったそうな。

鬼退治：表

夕刻には随分早くに、かぁかぁと小屋の手前で五月蝿く鳴く烏。それは、人の言葉を介していた。

「カァカァ！　丸末山（まるすえやま）!!　丸末山!!　丸末山ニ鬼ガデタァ!!　波柱ァ向カエ!!　向カエ!!　」

「カラスのくせしてしゃべるのか……」

そう呆れながら驚いたが、西洋には人真似する烏がいるという話を聞いたことがあったので、あれは烏だったのかと納得（かんちがい）する。

そして、ささっと身支度をし始める。最後に赤い首巻きを緩く結んで、足袋を履き小屋から出る。烏の案内の下、夕日が落ちる前には丸末山に辿り着く。烏は息切れを起こして、地に伏せてしまっているのに対して、男は全く疲れを見せていない。烏はその場で休ませて、山へと入っていった。

山は草木で生い茂っており、樹の影で日の光は一切断たれていた。成る程、日の光で蒸発してしまう奴（おに）らの拠点には打って付けだ。

山林を進んでしばらく、日も沈み山の中腹辺りであろうか。男は火を焚いて、その場に座り込む。更には、煙管に火を入れて一服する。端から見れば、油断しているように見えるかもしれない。しかし実際は、火を焚き、煙草の煙を吐いて鬼を誘っているのである。

果たして、山の主は現れた。それは、この山に迷い混んだ子供、それを探しに来た大人たちを喰らいに喰らい数ヶ月。鬼としてはまだまだ駆け出しではあるが、並の鬼殺隊を幾人も殺す実力を持っていた。鬼はこのまま殺してはつまらないと、男の後ろから声を掛けてやる。

「ヒヒッ、こんなとこで野宿なんぞして。鬼に喰われちまうぞ」

「いや。生憎、鬼に嫌われる体質でな。お陰でいつも逃げられてしまうのよ」

だから、追うのが面倒なんでそっちを待ってたのサ。と薄笑いを浮かべて、鬼に向き合う。

鬼になってから、鬼殺隊に対峙してもさして恐怖は覚えなかった。

圧倒的にこちらが有利であり、実際、簡単に殺せたからであった。鬼にはそれほどの実力があった、多くの人間を喰らい自信もあった。それでも目の前の男が、死神のように見えた。鎌を首に掛けられてもう逃げられないような錯覚を覚えた。

恐怖を覚えたとき、生物の行動は二つ。恐怖に向かっていくか、逃げるか。鬼は前者を選んで、男に攻撃を仕掛ける。叫びながら、腕を樹木の如く変化させて勢い良く男の方に伸ばす。

「う、うぉぉぉぉぉぉ!!!!!!!!!!!!」

「やれやれ。逸るなよ」

鬼が男が居たところに、攻撃を当てる頃には。既に鬼は後ろを取られていた。男は樹木に変化した腕を避けながら、鬼の死角を通ったのだ。

男は一呼吸置いて、貫手で鬼の首を飛ばすつもりで、一撃を入れる。鬼は後ろを取られ、振り向き、その一撃をまともに受けてしまうが、首が飛ぶことはなかった。首に傷跡が残る。

「グゲェエ！　イ、イデェ！　ゴハッ。糞が!!　何しやがった!!　」

「ほう、この程度じゃやはり無理か」

「うぐぐ、まだイテェな。だけど、こんな傷直ぐに……　っ!?　な、治らねぇ!?　」

「あぁ、治らねぇよ。ふむ、脆くなっては居るようだな」

鬼が慌てているところで、もう一呼吸。今度は『コォォォォ』という奇妙な呼吸音を発しながらの呼吸であった。

そうして、鬼が躱す間も無く、首元に淡く光った拳を叩き付ける。

［仙道・波紋疾走］

男は仙道という呼吸法で、太陽の力を身に纏う術を持っていた。それは普段からそうであり、軽い呼吸も全てその呼吸であった。太陽に嫌われた鬼たちに対して、この力は特攻を持つ。故に男は無手での戦いを得意としているのだ。

今度の一撃で、鬼の首から上が宙を舞う。それが地面につく前に、今度は淡く光った脚で蹴りを見舞い鬼の頭（かぶり）は蒸発した。

「ふぅ、さぁて帰（けぇ）るかね」

何事もなかったように、焚いた火を消して、山を降り、帰路に着いた。夜半ば、朝になる前には自宅の小屋に着いた。

手拭いと着替えを持って山奥の渓流で身を清め、序でに魚を取る。

そうして、朝になる頃に眠り着き、昼には起きて飯を食らっている内に、次の鬼の知らせを烏が持ってくる。

幾らなんでも、早すぎるだろうと苦笑しながら、男は準備を済ませて鬼退治に向かっていった。

童（わらべ）を護りし、泣き虫坊主

随分と鬼退治に向かっては、自宅に戻り身体を清め、朝飯を食っている途中に烏が来てサッサと飯をカッ食らい、烏の案内に従って、鬼を見つけこれを退治。

という日常にも慣れ始めた朝食時、男は烏の知らせを待ちながら昼用の握り飯を拵えていた。そうして、丁度作り終わった時に烏の呼び声が聞こえてきた。

「カァカァ！　？梅（おうめ）!!　？梅ノ日ノ出山!!　日ノ出山!!　日ノ出山ニ鬼ガイル!!　直チニ向カエェエイ!!　」

「ふむ、？梅ねぇ。確か、東京府だったか」

いやだいやだ、都会の山奥ってのはどうして怪異が多いのか、などと吐き捨てながらも支度を済ませて小屋を出る。最初は忘れていたが、しっかり刀も持って出る。あの女刀鍛冶に鞘に微量の埃がついているとバレたのだ。その時の怒りようったら、泣きようったら、喚きようったら麓の村まで響いたとか。ちゃんと持って出ないと、また面倒事となるだろう。きちんと腰の帯に下げてやる。なお、警察隊なんかに咎められたら、模造刀のお守りとか言って誤魔化してたそうな。これも後にバレて、また喚かれるのだがそれはまた別の話。

さて、いつも通り烏を置いてさっさと道を行く男。もともと怪異殺しなんかやってたもんだから、日本の地理の大体は把握していたので、烏の案内に沿っていたら日が暮れるとすっすっと走る。烏も中途で力尽きたのか、追いつけぬと諦めたのか既にいなくなってしまっている。向かう途中にさっき握った飯を食らいながら、歩を進める。夕刻前には早く、間昼時には少し遅いような時間に男は山の中を進んでいた。この山には確か寺があったはず、そこに鬼が潜んでいるのではと寺に向かう。

寺より少し離れた山の中腹、そこでは童たちが遊んでいた。もうすぐ、日も暮れる。故に童たちに声掛けをしてから、鬼を探すことにした。

「よう！　嬢ちゃんどもに坊主ども、何してんだ？　」

「んー？　おにーさん誰？　」
「俺か？　ちょっとした旅してるもんさ」
「へーそうなんだ、今かくれんぼして遊んでるの」
「ほー、隠れん坊か。あんま暗いとこにはいかんようにな、こわぁい鬼がここらをうろついてるってさ」
「鬼って暗いとこにいるの？　」
「そうさ、だから暗くなる前……　今日だともうそろそろだな。家に帰(けえ)るんだ」
「わかった！　あ、そうだ！　おにーさんもお寺に泊まっていかない？　私たち、この山の奥のお寺に住んでるの」
　そこまで聞いて、鬼はこの山の別所に潜んでいるとすぐに理解した。また彼らを守るためにも、その近くにいたほうが良いと思考を巡らせ「おう、頼むよ」と子供たちに寺まで案内してもらった。
　寺には悲鳴嶋という泣き虫の坊主がいた。この坊主が童たちの親代わりをしているらしかった。
　男を怪しいものでないかと少し訝しんだようだが、子供たちに軽く懐かれていたので、大丈夫であろうと判断された。寺の縁側にて、座りながら坊主と男は語らう。童がいる場では煙管を全く蒸かさない男であった。
「結構な体躯じゃないか、あんた」
「はは、よく言われる」
「お茶持ってきたよ」
「おお、沙代か。ありがとう」
　世間話をしていると童の一人が茶を入れて持ってくる。男は悲鳴嶋が童から茶を受け取る様子を見て、眼が見えていないことを悟る。武闘家故の観察眼であった。
「その眼、何かの病気か？　」
「ああ、この子らくらいの時は見えていたのだがな」
「ふむ、ちょいと眼を閉じておきな」
「む？　何故だ？　」
「良いから、良いから」

悲鳴嶋は困惑しながらも、瞼を降ろす。男は一呼吸で仙道を練って、軽く指先に集中させる。そして、瞼の上に軽く指を重ねた。

［仙道・治癒式波紋　応用　眼部］

それは数瞬の出来事、悲鳴嶋にしてみれば目がジーンと熱くなるようなものが走る。瞼の上の指を離して男から声がかかる。

「ゆっくり瞼を開けてみな、ゆっくりな」

「何をしたんだ？　目があつｋ――っ!?　」

瞼を急に上げて、白い閃光が目の中に迸る。驚いて、目を両の手で抑える。

「これは、どうなって……？　」

「瞳の中が曇っているようだったのでな、お呪(まじな)いをかけたのさ。も一度ゆっくり開けてごらんよ」

男の言葉に従い、ゆっくりと目を開けていく悲鳴嶋。まだ少しばかりまぶしく、涙で滲んで視界はぼやけていたが視えた。昔のように色づいた世界が確かに視えているのだ。坊主は泣いた、いつもよりも長く長く。童たちも共に嬉しくてワーワー泣いた。そして、坊主と童たちとは抱き合った。

男は一人、邪魔しちゃいけねぇと寺から少し離れて煙管で一服した。その煙はいつもより少し、美味まかったそうな。

閑話休題。

その日の晩、寺を鬼が襲ってきて、男がこれを撃退。恩を受けてばかりは礼知らずと、悲鳴嶋は童たち含めて鬼殺隊に入隊。（悲鳴嶋がやめるよう言ったが、童たちもそう言ってきかなかったそうな）

男は、彼らに産屋敷を紹介し（自分の継子にしてはといわれたが、自分のしてきたそれは自分でなければ死ぬようなものだから嫌だと断った）、その伝手で岩の呼吸の育手に教わり、後に柱となるのだが、その話は別の機会に。

癒しの波紋

それは、産屋敷に悲鳴嶋の坊主を紹介して、あれこれ問答してから数日経った頃だった。

相も変わらず、ピーピーうるせぇ刀鍛冶のガキが刀研ぎながらする話を聞き流して煙管蒸かしてたら、隊服着てる見るからに重傷を負った子供が脚引きずりながら刀を杖代わりにこっちに向かってのっそのっそと歩いて来た。

「おい、鍛冶屋少しばかり声を抑えな。ちょいと重めの客人だ」

「あぁん？　客人だと？こんな山奥に誰が来るって……」

ガキの返しを皆まで聞かぬうち子供の方にすっと歩み寄る。軽く後ろでひぃーと声がしたような気がする。

「おい、何があったんだ？　」

「あ、貴方が、波柱……様です…か？　」

「そう言うことになってるな。それよりその身体はどうした、鬼にでもやられたのか」

「はぁ……はぁ。はぃ、お恥ずかし、ながら」

少年は全身に切り傷、打ち傷を負い、幾らか骨も折れているようであった。刀を杖にしなければ立つこともままならないだろう。そんな状態ながらも受け答えが出来、意識もはっきりしているようだ。

「……そうか、分かった。聞きたいこともあるが、話は後回しだ。とりあえず小屋まで運ぶぞ」

「え、うぁ。あ、ありが、とう、ござ、います」

男は子供を背負って小屋まで戻り、刀鍛冶を追い返して仙道による治療を施した。さすがに折れた骨は薬草を刷り込んだぬのきれでふん縛って木の板で強制を入れ歪な形になるのを防ぐ程度となった。とはいえ、打ち傷切り傷の類いは全て塞がった。

治療が一区切りして、煙管に火を灯す。一息吸い込んでからゆっくりと吐き出す。その子供は体の痛みからか体力の限界だったからか眠っていた（気絶した）。しかし、慣れない煙草の煙でむせて目覚めた。

男はそれを狙っていたのか、鬼殺隊の子供に話を聞き始めた。
「なんでぇ、その大怪我は……　どうしたら、そんな堅ぇ服着て体が襤褸(ぼろ)切れみたいになるんだよ」
「えほ、っ。…　はい、私の修練不足です。恥じ入るばかりで」
「それはちげぇねぇわな。その程度じゃ、鬼狩りは無茶だよな」
鬼殺隊の子供はその言葉に何も返せず、顔を悔しさに歪ませていた。
「だが、まぁ俺はお前らがどうやって鬼狩りとなるのかよく聞いてないんだ。俺は産屋敷(あのガキ)にそのまま招き入れられたからよ。どうも正規の入り方じゃないみたいなんだよな」
男は知らない。彼ら鬼殺隊の子供たちが如何様にして鬼殺隊として認められるのかを、正規の方法でないことは刀鍛冶(うるせぇガキ)から何度か聞いたが詳しい試験などは彼女も知らなかった。
「だから、その弱さを恥じるこたぁねぇ。ちゃんとわかってるならそれでいい」
「はい……　ってあれ。体、ほとんど治ってる!?」
「ははは、今更かよ」
その晩は、その子供をゆっくり休ませるため寝床を貸してやり、男は囲炉裏で火の番をしながら夜を明かした。

初めての説教

次の日、男はその子供が次の任務に行くのを見送ってから、烏の鬼退治の知らせも聞かず真っ直ぐとある屋敷へと足を向けた。もちろん産屋敷邸である。屋敷に無造作に入って、邸主を見つけると襟元を掴みあげた。

「どういうつもりですか。いきなり」

「それはこっちのセリフだ。なんで俺の小屋に怪我人なんぞ運び込んできやがった」

男は耀哉の真意を何となく察していたが納得はできなかった。さらに言えば、それに対して激怒していた。耀哉はなんともないような雰囲気で正直に答えた。

「・・・ ええ、貴方も察しているように、貴方がどの程度の怪我人を治せるか知りたかったので鋏烏に貴方の小屋まで案内させました」

「しかも、その前の任務に強い鬼でもあてただろ。裂傷が数えきれねぇほどと数十か所の打撲痕、骨折もしてた。だけどそれが日常茶飯事のように意識だけはしっかりとしてた」

「はい、その通りです。いやはや、大きい骨折以外は完治とは現代医学以上に頼も――

「ふざけるのも大概にしろよボウズ。お前がしてるのは鬼一体に襤褸(ボロ)切れ寸前になるようなガキを玩具のようにこき使ってるだけだ」

「しかし、そう簡単には死なないはずですよ」

男の怒気が満ちた説教に、それでも耀哉はなんでもないように返し続ける。

「なんでわかる？ 」

「彼らには七日間、飢餓状態の鬼たちが跋扈(ばっこ)する山で生き抜くだけの力があるからです」

「なるほどな。そいつが話に聞く選別試験ってわけか」

男は仙道を込めず、勢いがほぼない軽い張り手を耀哉にぶつける。しかし、そのはたきは耀哉の心を抉った。自分がこんな風に頬をはたかれ説教を受けるという経験がほとんど無かったゆえか、その張り手

には怒りと思いやりがあったゆえか。頬はほぼ痛まないのに何故か胸の奥が苦しくなった。
「それが言ったまんまの選別なら狂気の沙汰だ。蟲毒でも作る気かてめぇは」
「鬼舞辻無惨を倒せるのであれば、私たちは手段を選びません」
ここで産屋敷耀哉は初めてその声を震わせた。平静を保たせるような落ち着いた声はその悔恨故か震えていた。男は逆に選別方法の愚かしさに怒りを通り越して呆れながら、捨てるように言葉を放った。
「手段を選ばないとかそういう話じゃないだろ、阿呆すぎて話にならんな」
「貴方に何が分かるっていうんだ！　」
「何もわからんがお前らのやってることは、ただ無為に命を犠牲にし過ぎていることには違えねぇ」
立場が反転した。産屋敷は生まれて初めて噛みつくように叫んだ。怪異殺しはそれを受けて正論を返した。男の主張は何一つ違わない。そして、それをその通りだと受け止めそれでもなお歩みを止めぬ、とあと数年歳を重ねていれば返せただろう。
しかし、正論（それ）を受け止めるにはまだ青年は若すぎた。何も返す言葉はなかった。
しばしの沈黙。
後、男は産屋敷（こぞう）の襟元を放り煙管を取り出す。耀哉の顔はいつもの姿からは想像もできないほど歪んでいた。うっすら目尻に涙も浮かべている。
「なんだよ腹黒小僧、年相応なとこもあるんじゃねぇか」
「……」
「こうしてお前を叱ってくれる奴はいなかったか、泣きそうになってるぞ」
「っ――」
男は薄ら笑って産屋敷を茶化しながら煙管から煙を呑み込む。それに産屋敷は軽く恥じらい、涙をぬぐい去って出来るだけ平静を装い

言葉を返した。
「ええ、貴方の言う通りです。しかし、この選別で何人もの強い隊士が生まれているのも確かです」
「死んだ奴は仕方ないと？　馬鹿言え、その強い奴の何倍の人間がその試験で死んだ？　或いは試験を切り抜けても、その後死なない保証はないだろうが」
「ある程度の死人が出るのは仕方ないのです」
「ある程度と来たか。その程度が狂ってると言ってるんだがな。なんなら、俺がその試験とやらを管理してもいいがね」
「は？　」
「その試験方法が言ったまんまなら考えなしで、非効率的で死人が多すぎる。俺なら軟なやつは通さないし、死人が少なく済む」
　産屋敷耀哉にとってこの男がそこまでしようと動くことは想定外だった。ただ、悲鳴嶼から眼を治してもらったという話を聞いて、怪我人も治せるかを確かめようとし、この正体不明の男の力の程を見定めようとしていた。さらに言えば、この鬼殺隊を抜けるようなことをいつ何時(なんどき)言ってきてもおかしくないと思っていた。しかし、怪異殺しを名乗る男はより鬼殺隊として重要な役割を担おうと申し出てきた。
　耀哉の中に『彼ならばこれからの鬼殺隊の隊員の質を上げることができるかもしれない』という期待と『何かを企んでいるのではないか』という不安が入り混じる。しかし、提案自体はもっともらしいものだし、よりよい試験方法の考えがあるなら聞いてみるのも悪くない。
「具体的にどうするつもりなんですか」
　紫煙をゆっくり吐き出しながら、男は選別の方法についての大まかな考えを話し出したのだった。

幕間：鬼の頭領と上弦の月

鬼舞辻無惨は現状を憂いていた。
千年ほど前に鬼として新生した頃よりかはまだマシではあるが、文字通りに血を分けた鬼が尽く斃されているともなれば、苛立つもの。
しかし、配下にこの苛立ちをぶつけたところで心の安寧やら平静がどうにかなるわけではない。
苛立ちつつも、あるモノを訪ねていた。
「私だ。話がしたい」
そこはとある山奥の捨てられた神社の社、そこに声をかけると嗄(しわが)れた不気味な声が響く。
「お主が阿に〝はなし〟とな？　くっくっく、相当難儀なようだのぉ。良いぞ、入(い)れ、入(い)れ」
鬼舞辻はこめかみに青筋を浮かべつつも、社に歩を進める。社の中は神仏の形とも言える神体が祀られるのが本来有るべき姿だが、そこに居ったのはしゃれこうべの山と一つの童(わっぱ)。
「久しいの、兄弟。で、どうだ？　陽を克服する目安は立ったのか」
「無駄話はいい、貴様に仕事を渡しにきた」
童(わっぱ)は少し険しい顔をした。
「仕事だぁ？　なんぞ、また怖いのが出たか」
「千年前のセンドウだのハモンだのを使う男がまた現れた」
「あぁ、あれか。そうだのぉ、確かに並の怪異じゃぁ、あれに溶かされてしまうな」
ポリポリと未だ溶け続けている右の側頭部を掻いて、童(わっぱ)は思い出すように呟いた。
掻いた指がぼとりと溶け落ちて――直ぐに指が綺麗に生え戻りポツリとぼやく。
「上弦の一の座を貰ってからというもの、ろくな使い手も居らんかったんで腕がなまりそうだったんじゃ」
「期待していいんだな？　酒？」

童(わっぱ)は深く頷いて、どこからか出した瓢箪から酒を喰らって調子良く応えた。

「応ともさ。阿が相手では、さしもの奴(やっこ)も夜は越せないさね」

「任せたぞ」

そうして鬼舞辻は社を後にした。

本来の鬼舞辻無惨であれば、波紋という鬼特攻の技術があるという情報を得た時点で拠点である無限城に引き篭もり、時間経過でその技術者が死ぬのを待ち、後続の技術を持ち得る者たちを未熟なうちに殺してしまうという手段を取っていただろう。

しかし、この物語の鬼舞辻無惨はこの時煩わしさや、憤りは感じているものの怯えや生存本能のままに逃げるという気持ちは一切無かった。

約一千年前に怪異として生まれ出(いで)た時の仙道使い達、そして数百年前の呼吸を開発した剣士。

誰一人として、今まで鬼舞辻無惨に辿り着けた事はなく、それは正しくどのような敵が来ようと自分にまで及ぶまいという、強者としての余裕があったからに他ならなかった。

柱合会議にて（前編）

炎柱、煉獄槇寿郎は鬼を倒した帰りに鎹烏に柱合会議を行う旨を伝えられる。

あの波柱という信用ならない男が来てから、半月も経たないでの柱合会議。本来、半年程の時間を置いて柱たちの意見を基にお館様が方針を定めるものであるが、前回と今回は例外である。

「わかった、向かうとしよう」

また、あの男の話だろうか？　不満に息を漏らして、酒壺から一口呷りつつ槇寿郎は産屋敷邸へと足を運ぶのであった。

産屋敷邸にて、波柱はすでについていたようで屋敷の縁側に座して煙管を吹かしていた。

槇寿郎は頭が痛くなった、前回は食客のような扱いだったしお館様は寛大であるから、こちらも何も言わなかったが、柱となったならもう容赦はない。

「おい、波柱。煙草を吸うのはお館様の前では控えろ。後、縁側（そこ）ではなく庭（こちら）に来い」

声を低くして、若干の怒気を孕ませながら男に声をかける。槇寿郎としては代々恩義あるお館様に対して、無礼な言動や態度を示すこの波柱に対して苛立ちを感じていた。そも、本当に素手で鬼を倒せるのか怪しい。お館様の言葉を信じないわけではないが、真偽は不明瞭である。故に不信感は湧いてしまう。

一つ間を置いて、男は槇寿郎を見据えて煙を吸い込み、面倒くさそうに肩を竦めて煙を吐き出した後、けだるそうに一言で返答をした。

「いやだね」

「なっ!?　貴様どういうつもりで――」

槇寿郎が怒りに任せた反論を告げるより前に、男の言い訳が始まる。

「ハ、お前さん何も、俺に喧嘩売りに来た訳じゃなかろう？　それにここの主には諸々許可をもらってるしな」

「っ……」
「ここの主か、あるいは使用人に煙が迷惑だからやめろといわれりゃ煙管はしまうし、庭に出て座れと言われれば考えなくもないが……この屋敷の使用人でもないそれも酒壺持ち込んでる奴にそんなこと言われても、聞く道理はないだろう？　」
　槇寿郎は言葉に詰まり、男は言葉を放つ。男の言には確かに筋は通っている上、酒壺を持ち込んでいる自分には返す言葉もない。波柱が煙管を吹かしている割にはやけに澄んだ空気を軽く吸い込んで、ため息をし諦めることにした。
　水柱と鳴柱も到着すると、波柱の男に一言二言文句を垂れたが、先程と同じような言い回しで結局、縁側から離れさすことは叶わなかった。

最後に来た鳴柱が言い負かされて、ぐぬぬと唸っていると、産屋敷が姿を顕わにした。
「みんな、良く集まってくれた」
　その声を聞いたと同時に波柱以外の3人の柱は、産屋敷の正面に横並びとなり跪く。
　男は相も変わらず縁側で、煙管をふかしており、煙を吐いたあとに欠伸まで分かりやすく漏らす始末であった。
　柱達は額に青筋を浮かべながらも、産屋敷への挨拶を口にして、産屋敷はそれに応じて今回の議題を述べた。
「今回は波柱から提案された入隊試験や隊の規則の改正について君たちの意見も聞きたいと思ってね」
　柱達は、やはり波柱の話であったかと考えつつ、改正案を出してきたことに驚いた。今までの態度から鬼殺隊に協力するだけで隊のアレコレには興味が無いものと思っていたからだ。
　波柱は最初に提案の結論から話し始めた。
「まず、お前らに柱を辞めてほしいんだ」
　柱達は今までの態度も含めて我慢の限界で、怒声を返したのだった。

柱合会議にて（中編）

柱の３人は、波柱に喰ってかかる様に囲みそれぞれが罵詈雑言を口にした。

「巫山戯るのも、大概にしろ!!　俺たちをバカにしているのか!!?」

炎柱はゴウゴウと燃える炎の様に激しく怒声を上げ、

「お館様のお気に入りとはいえ、立場も姿勢も弁えず、付け上がりがすぎるな？　」

水柱は静かながらも確かな怒りを込めた水の様に冷たい言葉を放ち、

「貴様は一体何様のつもりで、モノを言っているのだ!!　最近入ったばかりの青二才が！」

鳴柱は響く様な大声で雷の様な苛立ちをぶつけた。

男は、一瞬、無表情となったが、すぐに呆れたような顔になり、はぁと一つ息を零して、口を閉ざした。

それが柱たちの怒りを加速させ、刀にまで手がかかる剣呑な雰囲気が漂う。

「やめるんだ」

そして、それを横から怒りが吹っ飛ばされる様な優しい、しかして有無を言わせぬ音(こえ)が、場を支配した。

柱たちは、庭に傅いてそれぞれ取り乱したことを恥じ入るように産屋敷へと謝罪の意を口にした。

男は、それを横目にすっと縁側に座りなおして煙管の灰を紙に包んで、別の包み紙から新しい葉を入れなおして火を灯す。

「しかしながら、お館様。もはや、波柱とて我らと同格であり、且つ新入り。そいつの行動は目に余るものが多すぎます」

謝罪を口にした後に、波柱をにらみつけながら、男の態度に苦言を呈したのは炎柱であった。

「……その気持ちは分かるよ、槇寿郎。他人がいきなり土足で、家を踏み荒らしていると感じるように、波柱が幅を利かせているのは、先代から紡いできた柱の誇りを汚されているように感じるのも無理はな

い。他の2人も同じ気持ちだろう」
　産屋敷は炎柱の言を尊重し、労い、肯定的に扱ったが、その最後に「でもね、」と続けた。
「彼の意見を先んじて聞いた私は、現在の状況も踏まえて、柱を一度解体すべきかもしれないと思った」
　産屋敷は柱たちの顔を見据えながら、哀しい貌してそう告げる。
　柱たちは、【現在の状況】と聞いて、なぜ産屋敷がそんな意見を良しと考えたのか、理由を悟り始めていた。
　男は、怒声に囲まれたときから変わらず、我関せずという風に相変わらず煙管を吹かせている。産屋敷から語らせた方が、理解も受け入れもしやすいだろうと産屋敷へ丸投げしたらしい。
「言うまでもないことだけれど、目をそらし続けてきたことだからあえて言おう。波柱を含め4人の柱しかいない現状では、これ以上柱の死人を出すと鬼殺隊自体が壊滅する……違うね、もう半ば壊滅してきている」
　産屋敷が語った現状は、3人の柱の心臓に鋭く刺さった。柱合会議で集まれた柱は鬼狩りが忙しくてこの3人しか来れなかったわけではなく、この3人と波柱の4人で全員だったのだ。
　本来、柱とは9人からなる、鬼殺隊の最高戦力であり、下弦の鬼であればあっさり倒せるほどの力を有している。それが、今この場では波柱が来るまで3人まで減っていたのだ。
　最高戦力が減っているということは、当然並の隊員であれば、もっと被害が出ていた。端的に言ってしまえば、鬼の強さが鬼殺隊を遥かに上回っており、崖っぷちの劣勢に立たされていたのだった。
「故に、鬼狩りを全て波柱に一任して、君たちには完全に後進の育成に努めてもらおうと考えたんだ」
「あ、変に誤解されるのも癪に障るから先に言うが、俺も育成側に回る体で提案持ち掛けたからな」
「波柱は君たち3人全員の戦果の2から3倍ほどの戦果を挙げている、彼には鬼がこれ以上強くなってしまわないように鬼狩りを続けてもらうべきと判断したんだ」

ここまで聞いて柱たちは、波柱がそこまで強いのかと差を感じ、また柱をやめろと言われたことにも一応は納得した。
「話は、分かりました。理屈も筋も通っています。後の鬼殺隊のためとなるのであれば、喜んで育手になりましょうとも」
水柱はいち早く切り出した。相談であるという持ちかけであったが、別案があるならまだしも覆らぬ決定であると悟ったのだ。
「あー、おっほん。私もその提案を呑みましょうぞ。波柱は気に入りませんが、提案自体は正しい。鬼殺隊が無惨の喉元に至るまで存続できなければ、本末転倒となりますからの」
鳴柱も続けて、同意をした。波柱に対してまだ苛立ちを抱えているようだが、理性は保っており正当な辞令であると理解していた。
「……」
残る炎柱は、なるほど理屈も筋も通っている正論であると理解はしていた。
しかし、答えかねての沈黙をしてしまっている。一つ強い懸念もあったのだ。
「槇寿郎、言ってみなさい。懸念があるんだろう」
産屋敷は、それを見抜いて炎柱へそれを打ち明けるよう促す。
「……はい。育手に回るということに不満は……ないとは言い切れませんが、それは引き受けましょう。ですが、こいつ一人に任せておいてはこいつが死んだときには……」
「尤もな言ではあるが、それは甘えも入っているな」
波柱が怒気を孕ませた声で、炎柱を見据える。
「そも、この提案は柱が3人斃れた時点で、産屋敷(こいつ)はこの判断をすべきだったし、お前らも提案すべきだったんだ。お前ら全員の驕りや傲慢さが今の結果を産んでいる。俺がそのケツ拭いて後始末し始めてるだけで感謝してもらいたいところなんだぜ？　」
男が散々他の柱を煽っているようにふるまったのは、彼も柱たちの傲慢さに苛立っていたからであった。柱たちがもっと危機感をもって現状に向き合っていれば、今より状況は良かったはずであったのは間違いない。

柱たちは何も言葉を返すことができなかった。それは正論であり、自分たちで現状を動かそうとはしていなかったからだ。
産屋敷耀哉もまた、口を噤む。自分がもっと早くに気付いて、この方針にすべきだったと悔やんで、心を痛めていた。
「ま、懸念は正しい。なんだっけ、つぎこ？　は取ることにした。丁度志願者がいるらしくてな。俺の後釜がいりゃいいんだろ？　」
はいはい、嫌われてんなーと炎柱の懸念を一蹴してこの話は終わりだとばかりに、男は次の話に移っていったのだった。